



rain 6



短編小説集

greentea0117

豪勢なワンピース

子供が小さい頃、服は全部手作りしていた。子供服は、すぐ小さくなるのに高い。三人の子供がいてやりくりが大変だったので、手作りを思いついたのだった。子供たちはみんな、手作りを喜んだ。けれどやはりお下がりには嫌なようだ。けれども私の腕も上がり、スカートをTシャツに、Tシャツを短パンに作り替えるくらいの技術は身につけていた。こうして三人の子供たちは、高校を卒業して家を出て行くまで、私の手作りの服を着ていた。今思えば不思議なのだけど、思春期になっても子供たちは私が作った服を嫌がることはなかった。むしろ結構喜んでいた。

「だって母さん、みんながお小遣いを服に使っているときに私は他の好きなものが買えるんだよ。ラッキーじゃん」

そう言った娘は今、大学生活を送っているが、時々送られてくるスマホの写真を見ると、やはり服には無頓着な様子だ。せっかくのキャンパスライフなのだから少しくらい着飾って、ボーイフレンドの一人や二人、一緒に写真も見てみたいと思うが、そうなったらなっただまた心配してしまうのだろう。

息子二人は服に、異様なまでの執着を見せ、一人は服飾の学校へ、もう一人はデザインの学校へ進学した。意気揚々と服を作る姿や、あらゆるものをデザインしようとする熱い心意気を見るのは、うれしいような不思議なような気持ちだ。とにかく子供たちは巣立ち、私のミシンは役目を終えた。

かのように思えたけれど、しばらく自由な時間を満喫した後、私は気づけばミシンの前に座っていた。けれどももう、何も作るものを思いつかない。子供たちがいた時、このミシンは休む間もなかったのに。取り残されたような気持ちになって、なんとなくがたがたとミシンを踏んだ。気づけば、娘に最後に作ったワンピースが出来上がっていた。そのワンピースで娘は花火大会に行ったのだった。女友達と行くと言っていたけれど、男の子だったのは分かっている。今思えば、娘も私が分かっていたことを知っていたのではないだろうか。

私はそのワンピースを着て、町へ出かけた。コーヒーを飲んでいると、ぽろぽろと涙がこぼれた。私は涙をふき、綿のワンピースが皺にならないよう座りなおした。それから手芸店に入った。自分のためのワンピースを作る、上等の布を探さなくてはならない。

「思い切り高いのにしよう。パーティーにでも着て行けるような、豪勢なのを作ろう」

そう思ったら、ふと娘のウェディングドレスの姿がまぶたに浮かんだ。私は年甲斐もなく、布地を手にしたまま声を上げて泣いた。

世界で一番いいところ

私はとうもろこしを育てて生活している。かなり大きな畑だ。背は高い方だが、とうもろこしはもっと大きく育つ。収穫前のとうもろこし畑は、大きな壁のようだ。私はその中に入り込み、とうもろこしの育ち具合を見る。

いつものように畑で働いているとがさごそと葉っぱが揺れ、大きな麦わら帽をかぶった人物が現れた。すんでのところで私とぶつかるところだった。その人は、麦わら帽をもちあげると、「これはどうも」

と言って、畑を通り過ぎて行った。私はなんとなく違和感を感じた。あまり手入れされていないと見える口髭、薄汚れたランニング。怪しいと言う感じではないが、いまどきこんな格好をしている人はいない。

「あんた」

私は声をかけた。

「どこから来たんだ？」

「この畑の向こうからですよ」

男は畑の向こうを指差した。

「そうか」

ときどきここをとおりぬけていく輩はいる。でもめったにいない。いたとしても持ち主の私に気づかれないようにこっそり通って行く。この男はなぜこんなにもどうどうと、まるでここが道であるかのように歩いて行くのだろう。

それからしばらくして、収穫間近のとうもろこしを見ていると、同じ男が、今度は出て行った方から現れた。

「あんた一体どこから来たんです」

私は思わず聞いた。

「ちょっと用事がありましてね。それがすんで安心ですわい」

「それでどこへ行くんです」

「そりゃ元来た場所です。とうもろこしがよく育ってますな」

「ええ、まあ……」

「わしらの頃もよく育ちましたわい。ときどき畑を横切る人に会いました。わしも一体どこからきてどこへいく輩なのか、不審に思いましたわ」

「はあ」

「それではお元気で」

男はにっこり笑いとうもろこしの葉の奥へ消えて行った。

それから、七十年後。私はとうもろこしの葉をかき分け進んでいた。

「あんたどこに行くんだ？」

この畑の主と思われる男が聞いた。

「ちょっとやりわすれたことがあって」

私は言った。

「人に会いに行くんです。どうしても一言、言いたいことがあって」

「それはそうと、なぜうちの畑を横切るんだ？」

「気づけばここを通過していたんです。用が済んだらすぐに帰ります」

「その時もここを通るのか？」

「はあ。ここはいいところすなあ。世界で一番いいところです」

白い玉

あるところに鬼がいました。鬼は悩んでいました。腹が減ったので山のふもとの村を襲おうと思っています。ところがこの春、この村では赤ん坊が四人も生まれました。物蔭から見たところ、赤ん坊は罪深いところが全くありません。鬼の中にいつも燃えている憎しみの炎さえ、吹き消してしまいそう。

それで鬼は山奥の岩に肘をついて、考えていたのです。大人だけ襲うか？ でも大人がいなくなったら赤ん坊は生きていけない。別の村を襲うか？ でもそこは別の鬼の縄張りだから、報復をうけることになるだろう。

俺も年を取ったんだろうか。鬼はひとりごちました。赤ん坊ごときに骨抜きにされる自分ではなかったはず。鬼は草をはみました。考えるのに疲れてねむってしまいました。

ふと目覚めると夜でした。少し欠けた月がこうこうと地上を照らしています。

「もう食いのことを考えるのはやめよう。飽きた。鬼ごとき、食わんでも死にはせんだろう。不甲斐ないが、こうしてごろごろとして季節が過ぎていくのを眺めるのも鬼らしいといえれば鬼らしい」

鬼はそう自分に言い聞かせ、じっと月を眺めていました。だんだんと月が団子のように思えてきます。

「む、いかん、やっぱり考えてしまう。あのくらいの大きさのもちを食べられたらなあ」

ずっと眺めていると、月でうさぎが餅つき大会をしているのが見えてきました。ぺったんぺったん、やけにおいしそうです。

「ひとつぱしり月まででかけてこよう。鬼に餅をわけてくれないという法はないだろう」

そこで鬼は竜が住む山を探しに出かけることにしました。竜は鬼の計画を聞き、面白いと思いました。月へ行くなんてどうして自分でも思いつかなかったのでしょうか。

「昨日、うさぎが餅つきをしていた。今日の夜でかけよう。きっとまだやってるはずだから」

鬼は言いました。竜は鬼をのせて飛び立ちました。ところが鬼はとても重くて月までたどり着けそうにありません。

「うーむ」

竜は考えました。

「あんたをおろして一人で行こう。餅は持って帰ってやるよ」

「いや」

鬼は言います。

「あそこについている餅をここに持つてくることなどできるもんか」

「やってみないとわからない」

竜は飛び立ちました。鬼は月を見上げ、どんどん小さくなる竜を見ていました。やがて夜が明け、月が白く薄いせんべいのようなところ、竜がもどってきました。

「おーい、どうだった？」

鬼は待ちかねてどなりました。竜の両の爪は宝玉のように白い玉をつかんでいます。餅だ！鬼は思いました。竜はそれを鬼に投げつけました。白い玉はポン、と弾け煙がもくもくと立ちました。

「どういうことだ、これは！」

鬼はどなりました。

「月のうさぎが言うには、お前は鬼にしてはあまりにたよりないとき」

気づけば鬼は毛むくじゃらの人間になっていました。

「だましたな！」

「飢え死にするよりましだろう。お前がいくじなしだからさ。せいぜい人間として生きてくん
だな」

「くそう！」

鬼は地団太を踏みました。

七草粥ダイエット

お正月、食べ過ぎた胃を休めるため七草粥があるという。でもそれじゃあ私は年がら年中、七草粥を食べなくてはならない。七草の入った白い粥を見ながら、今年こそはダイエット、そして彼氏ゲットと新年の目標を定めた。

実家からアパートへ帰ると、私の部屋にはそこそこに誘惑があった。冷蔵庫のビール、豊富なつまみ、油っこい冷凍食品の大量ストック、スナック菓子の大量ストック、段ボール一個分のカップ麺も押し入れにひそんでいる。自分がどうして今のような体型になってしまったのか、客観的に理解した。スーパーで段ボールをもらいそれらのものを全部詰めて、友人にばらまいた。タイムセールや広告を見て安く買い集めたそれらを手放すのは悲しかったが、新年の目標を達成するためには仕方がないと自分に言い聞かせる。

私は七草粥ダイエットを試みることにした。一日一食は七草粥ですませるのだ。そういうわけで、私はときどき台所に立って七草粥を作った。正月にはスーパーにたくさん置いてあった七草セットは、正月の終わりと共にすぐに消え去った。けれど、私はそれがダイエットの守り神でもあるかのごとく、七草を探し求めてスーパーや商店街をうろついた。おかげで飲み会に出ることも少なくなった。もしかしたら出会いは減ってしまったのかもしれないが、飲み会で騒ぐことにもだんだん飽きがきていたのだ。

七草粥を食べ始めて思ったのだが、もしかするとこれは体にいいのかもしれない。なんとなく体が軽い。体が少しずつ浄化されていくかのようだ。そうなると、一日二食三食と、毎回七草粥を食べるようになった。もうどの店へ行ったら七草が手に入るのか、すっかりわかっている。台所にも二日に一回は立つ。けれどダイエットの効果はさほど無いようだ。最初の一週間で二キロ落ちたが、それ以後はそのまま停滞している。

「最近肌つやがいいね」

話したこともない人にそう言われた。私はテレビ関係の仕事をしていて、めまぐるしくいろんな人に会う。そうやってきた人は私と同じ裏方の仕事をしているようだが、名前は知らない。顔は見たことがある気がする。

「ああ、どうも」

私は少しぼかんとして答えた。

「何かあったんですか？」

別に隠すこともないので、私は七草粥ダイエットのことを話した。

「へえ七草粥」

その人は興味を示した。

「毎食ですか？」

うなずくと、

「私もやってみようかな」

と言う。でも見れば、もう少し食べたほうがいいんじゃないかと思うような女の子だ。それでも私にしてみれば痩せているだけ羨ましいのだが、

「ああダイエット効果はないよ。やっぱお米食べちゃってるし」

と言った。

「そうなんですか」

今度はその人がなんとなくぽかんとした。私は、

「あ、でも七草粥自体はおすすめ。体が軽くなるというか、体調がよくなるから」

そう言ってなんだか世話好きのおばさんのように、七草が手に入りやすい店なんかを教えてあげた。

年始の願い事は多分どちらも叶わない。体重はこれ以上減りそうにないし、彼氏も多分無理だろう。

「よかったら七草粥、食べにくる？」

少なくとも部屋を少し片づける気にはなるかもしれない。

今日何食べた

「今日何食べた」

私たち夫婦の夕食の会話は、毎日大抵このセリフで始まる。朝食と夕食はしているわけだから、その日の昼食のことだ。

「オレはね、焼肉」

「焼肉。出先だったの？」

「ううん、もうれつに肉が食いたくなって、焼肉屋に入った。店員せかしてカルビとモツを持って来てもらって、全部いっぺんに網の上にぶちまけた。あの食い方はうまかった。今度やってみよう」

「そうだね」

私は言い、ご飯を口に運ぶ。

「で、何食った」

「私はおさしみ。私もなんかがつつり食べたくなくて、さしみ定食奮発した。まぐろ、イカ、ハマチがかなりの量だった」

「それでいくら」

「お味噌汁、ご飯ついて七百円」

「ふーん」

魚の切り落とし部分を使っているから、本当に量が多くて満足感があるのにその値段なのだ。でも私はその種明かしを話す気にはならなかった。

結婚何年目からだろう。食卓で顔をつきあわせていても、話すことがなくなったのは。一日一回、夫婦で食事をすることにしようと言ったのは私だった。

「会話不足がすべての不仲の根源なのよ」

新婚の私は自信たっぷりに言い切った。私たちはその約束を忠実に守ってきた。一方がどんなに遅くなっても、ビールを飲みながら待っていた。会社での悩みから社会情勢まで私たちの話題は尽きなかった。

それは月の満ち欠けのように自然だった。いつのまにか、私たちの間から言葉が消えていった。とても静かだった。ある日は夫がきれいにグラッセにしたにんじんを食べ、ある日は私が煮込んだシチューを食べた。ずっと無言だった。どちらもが、言葉を出すタイミングを、永遠に失ってしまったかのようだった。

ある時酔っぱらって帰ってきた夫が言った。

「今日何食べた」

だらしなく玄関に寝転んでいる夫を見下ろしていた私は、立ち去ろうとして、夫を振り返った

。赤い顔で眠りこけている。この人はこの言葉を言うタイミングをもうずっと待っていたのだ。
私は眠る夫の横にしゃがみ言った。

「今日はカキフライを食べた。仕事疲れたから抜け出して、喫茶店でお茶を飲んだ。あなたは？」

すべての不仲の原因が会話の不足だとは限らない。私はそのことを悟りつつある。